



大学史こぼれ話／ドイツ編

世界初のアクティブラーニング

教育推進部教授 三浦 真琴

ヨーロッパでは1088年に世界初の大学がボローニャに作られてから1499年にバレンシア大学が創設されるまでの400年余の間に69校の大学が創設された。これを中世大学(Studium generale)と呼ぶ。イタリアとフランスでは1200年から1500年の間に約20校が新設された。イタリアの大学はボローニャ大学をモデルとし、フランスの大学は世界で二番目に古いパリ大学をモデルとしたが、三番目に古いオックスフォード大学もパリに倣った。イギリス、フランスに続いてスペインで12世紀末から13世紀初頭にかけて設立された大学はボローニャに範をとった。ドイツにおける大学の創設はこれよりも遅れ、14世紀中葉になってようやく誕生する。ドイツの大学設立が遅れたのは、貿易や都市の発展が遅れていたこと、小国分裂状態が始まったことなどによる。このドイツ領内(ドイツ語圏)に初めて作られたのがプラハ・カレル大学である(1348年)。以後、領内各地に大学が創られ、15世紀になってドイツ語圏内の大学はようやく16校を数えるようになった。なお、現在のドイツの地に初めて作られたのはハイデルベルグ大学(1386年)である。世界初の大学設立から実に三世紀も後のことである。これらドイツの大学は基本的にはパリをモデルとしていたが、学生団体の規約に関してはボローニャの要素を採り入れていた。また、イギリスの大学と異なり、ドイツでは学寮が発達しなかった。すなわちドイツに独特な大学文化はまだ登場せず、先駆者の要素を取捨選択したのである。全寮制の大学では学生を24時間、監視下に置くことができるが、それがなかったドイツでは授業を終えた学生は全く気ままに、それこそ暴飲暴食、乱暴狼藉を繰り返した(実はイギリスやその他の国でも、程度の差こそあれ、学生の悪行は茶飯事であった)。ところが、このならず者、与太者の集団である学生を抱えるドイツの大学が、突如、世界から注目されるようになる。

19世紀の初頭まで、ドイツは大学のみならず、科学や学問においても後進国であった。ところが教育改革者で言語学者のヴィルヘルム・フォン・フンボルトが1810年にベルリン・フンボルト大学を創設したことを機にドイツの大学は大きな変化を遂げる(この大学が近代大学の始まりである)。フンボルトが大学に求めたのは「学問を常にいまだ完全に解決されていない『問題』として、たえず研究されつつあるものとして扱う」ことであった。ドイツの大学が研究をその重要な機能として位置付けるまで、研究は大学の外—例えば王立協会など—で行われていた。諸外国に後れを取っているドイツの大学が世界の前線へと躍り出るためには、どの国の大学も手を付けていない研究に着目する必要があったのである。しかしフンボルトが重視したのは研究だけではなく、フンボルトは教育をきまりきった知識を教え込むことやそれを鵜呑みにすることではなく、進行中の研究によって導かれるべきものであると考えていた。これが「研究と教育の統合」と表現されるフンボルト理念である。当時のフンボルトの知名度に鑑みてこれを後付けの神話とする説があるが、実際にこの理念はゼミナールを通して体现した。ゼミナールは、参加者が知識を伝授される場ではなく、自分でおこなった研究の成果を発表し、それを批判的に吟味する他の参加者と共に討論するところであった。シュライエルマッハーは「ドイツの意味における大学についての随想」(1808)の中で次のように述べている。

「ゼミナールとは…学生はすでに研究者であり、教師であり、教師は教え

るよりむしろ、学生の研究を指導し、援助し、評価するという形で学生と教師の共同体である」

すなわち、ここに世界初のアクティブラーニングが登場したのである。

もう一つ、ドイツの大学教育に活力を与えたものがある。それが私講師である。国から俸給が支払われる教授・助教授と違い、私講師は無給だった。当時のドイツは俸給以外に学生の収める聴講料を収入とすることができたので、私講師はこちらだけで生計を立てるため、教授や助教授よりも多くの学生を集めようと熱意のこもった授業に勤しんだ。中には正教授の固定給を上回る聴講料を稼ぐ剛の者もいた。

若い私講師の授業に刺激を受け、ゼミナール型の実験室によって優れた研究者が育てられ、数多くの研究成果が生まれた。例えば生理学の領域では19世紀の100年間で後に独創的と評価される研究1286件のうち、およそ66%がドイツ国内で行われたものであった。急速に他国を凌ぐ成果をあげたドイツの大学は世界中から留学生を引き寄せ、その留学生は帰国後、自国の大学にゼミナールを導入しようとした。あるいは隆盛を極めるドイツの大学を視察に訪れた他国の大学教授は知的好奇心に目を輝かせるドイツの学生の姿を目の当たりにして、ゼミナールや研究を自国の大学に採り入れようと試みた。その成否は、国によって、あるいは大学によって異なるものの、それまで教育という機能しか持たなかった大学に「研究」という新たな機能を追加し、それを「教育」に反映させるドイツモデルは19世紀の世界中の大学に大きな影響を与えたのである。(次号はこのドイツモデルを採り入れたアメリカのこぼれ話です)



ヴィルヘルム・フォン・フンボルト

TIPS

グループワーク深化のためのスモールワーク ～Webでの掲載を開始します～

グループを編成し、話し合う材料を提示したうえで議論を促したり、課題を示して調査するように働きかけたりすれば、そこで直ちにグループワークが始まるわけではありません。共同作業をつつがなく実践していく集団としてメンバーの各々が心得おかなければならないことがあるからです。そのことを言葉や概念だけで伝えてもなかなか実践には反映されません。効果的なグループワークを展開するには、そのためのトレーニングが必要です(Group Work Training)。とはいえ、グループで共同して課題を解決するのが目的ですからトレーニングに多くの時間を割くことはできません。そこで授業冒頭に比較的短い時間で大切なことを体験できるスモールワークを提案します。コンテンツが出来上がり次第、Webに「TIPS」記事を順次アップしていきます。

FDプログラムのリデザイン

教育推進部教授 岩崎 千晶

1 FDこれまでのデザイン

教員は学生のためにより良い授業を作り上げていく努力と工夫をしています。大学が組織的にFDとしてこうした取り組みをサポートするようになったのは、授業アンケートが始まりだったと言えます。その取り組みは、本センターの前身の全学共通教育推進委員会FD部門・授業評価部門委員会で発行された『関西大学FDフォーラム』に掲載されています。

関西大学では2008年には教育開発支援センターができ、2009年には教育推進部に専任教員が配置されました。その後、教育推

進部の教員が中心となりFD活動を行っています。具体的な内容は教育開発支援センター Webサイト「活動記録」(下記QRコードよりアクセス)でご覧いただけます。

2020年にCOVID-19感染防止のためにオンライン授業を実施することになった際は、3月末からFD活動を開始しました。その後もハイブリッド形式で「オンデマンド授業」「生成AI」などその時々に応じたテーマを取り上げたFDを実施してきました。この度、これまでの流れを踏まえて、FDの内容と方法をリデザインいたしました。

2 FDこれからのデザイン

FDは大学の教育に関する政策提言等を行う「マクロな側面」、学部・学科等のカリキュラムマネジメント等を扱う「ミドルな側面」、個々の授業を扱う「ミクロな側面」があります。大学における教育制度を整えること、学部におけるカリキュラムをマネジメントすること、それぞれの授業をよりよくしていくこと、これらの三位一体が学生の学びを育むために大切な要素になります。各側面を支援するため、教育推進部・教育開発支援センターならびに教学IRプロジェクトは以下のプログラムを実施しています。2020年度以後は動画の配信も積極的に行っており、DropboxにFDプログラムとしてベーシックコースを設け、「大学の授業をデザインする(岩崎千晶)」

「ラバス記入の方法(山田嘉徳)」 「アクティブラーニングが求められる理由(三浦真琴)」 「学習評価の方法(山田剛史)」 「学生の学習意欲をどう高めるのか(山田嘉徳)」の5つのプログラムをご覧いただけます(下記QRコードよりアクセス)。動画の視聴時間は10-20分程度に設定しています。PDFの資料だけお読み取りいただくことも可能です。ご自身に合った方法でぜひFDにふれてください。また学部・学科からのカリキュラム相談にも個別に対応しています。最近では初年次教育の再編成に関するご相談が多いです。ぜひお気軽にお問い合わせください。

	研修内容
大学全体・執行部向けプログラム	● 新任教員研修(春学期1回) ● 教育実践フォーラム(旧教学IRフォーラム)(秋学期1回) ● FD/SDプログラム(秋学期6回コース) ● 教学IR調査報告会・WS(ワークショップ)(適宜開催) ● FDフォーラム(春学期1回) ● 学部・研究科執行部FD(適宜開催)
学部・学科向けプログラム	● 学部・学科向けセミナー・WS(学部・学科の依頼により適宜開催) ● 学部初年次教育担当者研修(学部の依頼により春休み開催) ● 学部・学科における教育プログラム設計支援 ● 教学IR調査結果フィードバック&FDセミナー・WS ● ライティングラボの利用報告&FDセミナー・WS
個々の教員(非常勤講師含)向けプログラム	● オンデマンド&ワークショップ(適宜開催): ベーシック・アドバンスコース ● ランチョンセミナー(適宜開催) ● 非常勤講師対象説明会(春学期) ● 授業改善に関わる個別相談(適宜)

*各コースの詳細は教育開発支援センター Web「活動記録」をご覧ください。



*FDプログラム動画(学内限定公開)



オープンでフラットな対話に基づく大学教育の創造を

教育推進部教授 山田 剛史

前回のニューズレター (Vol.42) 巻頭でも触れたのですが、大学教育における学生参画についてもう少し書きたいと思います。2023年7月に実施した学生調査(2,955名／回答率10.7%)では、「やる



気があれば、学生でも関西大学の意思決定に関与できると思う(「そう思う」17.0%)」「学生の意見を積極的に取り入れてくれていると思う(同13.5%)」など、本学の学生参画に対して肯定的に捉えられているとは言えない状況でした。大学教育の質保証(≒大学評価)の文脈で学生参画の重要性が増していますが、その前提として、大学におけ

る教員・職員・学生の3者の関係性の問い直しが必要だと感じています。3者がオープンでフラットな形で対話できる、そのような場や組織風土が求められます。

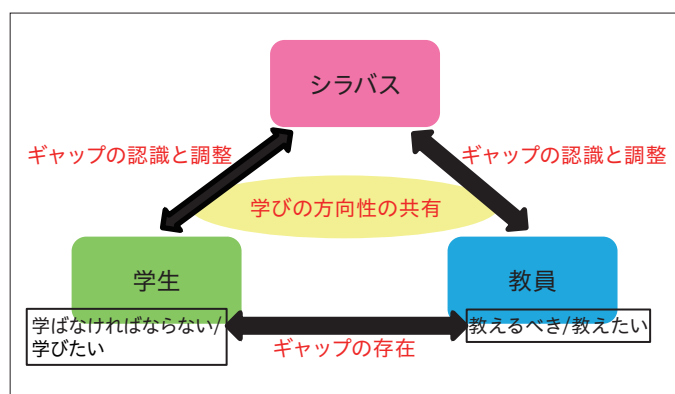
筆者は、実践的な試行として、2022年度に準正課的な位置づけとして「関大生の学びと成長加速プラットフォーム」を設置し、2023年度には正課教育として「プロジェクト学習2(未来の大学を創造する)」を新設しました。本授業は一般論としてではなく、本学における教育・学習上の課題を設定し、課題解決のための提案を行うものになっています。受講生は4名と超少人数でのスタートとなりましたが、意欲的な学生が集まり、毎回授業後も議論が絶えることがなく、本学ひいては大学教育全体にとっても有益と思われるアイデア・提案がたくさん出てきています(写真は「悠久の庭」で実施した授業風景)。最終的な成果については、大学にもフィードバックしていきたいと考えています。興味がある教員・職員・学生さんがいればぜひお声がけ下さい。こうした対話を根幹とした学びの場から組織的な学生参画による大学教育の創造へと繋げていければ幸いです。

学びの方向性を共有する仕組みとしてのシラバス

教育推進部准教授 山田 嘉徳

前号では、学習者中心の教育の視点からシラバスの役割に焦点を当て、「個別最適な学び」「協働的な学び」の一体的な充実が期待される中でのシラバスに求められるあり方や機能について、学習研究の視点から紹介しました。今号では、実際にシラバスが学生にとって科目選択の指針や学びのための有益なガイドとなる条件を「教員-学生間に見られる学びのズレの問題」から考えてみます。例えば、教員からは「授業は必ずしもシラバスの計画通りに進められるわけではない」とする声や、一方で学生からは「シラバスだけでは自分の期待することが学べるのかが判断できないこともあり、書いていることと実際の授業内容との間にズレがある」といった声も聞かれます。こうした声は、教員にとっては学部・研究科が掲げるDP(ディプロマ・ポリシー)に照らした教えるべき事柄や授業という一定の枠組みの中で専門的に教えたい内容があり、学生にとっては学ばなければならない事柄や学びたい内容があり、その両者の間にギャップが生じる状況にある、ということを示しています。シラバス記載内容のみにとどまらない多様な学びの現れや必然的に生じるズレに鑑みた場合、むしろギャップの存在を前提に、どうそこでの認識と学びの過程を互いに調整するかが問われ、こう

した学びの方向性を共有する仕組みとしてのシラバスのあり方が、学習者中心の教育において本質的に求められることといえます。シラバスが触媒となりそこで示された指針の必然性を教員-学生の双方で認識でき、多様な学生が集う中でも共に目標に向かう学びが展開し、循環していく。この見方・考え方を踏まえ、次号では、共有された目標に向かう学びを実現させる工夫について、学習研究に基づく授業デザインの観点から、有効なシラバス活用の方法を考えます。



学びの方向性を共有するシラバス

卒業生寄稿

肩の力を抜いて～LAを経験して～

藤原 稜平 (文学研究科)

皆さん、こんにちは！読んでいただき誠に有難うございます。こちらでは、大学での学びの支援にどのように向き合ってきたかを記します。

最初は、何をすればよいか分からず、先輩方の真似をしていました。ですが、なかなか上手くいきませんでした。年齢が近い方の学びを支援することを、「上から物を言う」ように感じていたことが原因だと思います。何かを伝える際は過度に気を遣っておりました。そのような中で、「友達のように接する」先輩方に出会いました。親しみやすい口調で話す様子は楽しそうで、全く「上から」ではありませんでした。それを契機に、堅苦しい敬語ばかりで話すのではなく、少し砕けたような口調も取り入れてみました。すると、学生さんは以前よりも、気軽に話しかけてくれるようになりました。加えて、私自身も、学生さんと話すことが好きになりました。

学生さんとの会話が好きになってからは、積極的に話し掛けるようになりました。隣にいて、「そうやんなあ、これ難しいやんなあ」「このことはどういう風に考えたん？」と。話し過ぎてしまうこともありましたが、学生さんから話し掛けてくれたり、質問してくれたりすると、とても嬉しかったです。このような経験を通じて、「話し掛けたい、質問したい」と思われる存在になれば、学生さんの学びの後押しになるのではないかと考えるようになりました。

大学での学びの支援で最も大切にしていたことは、自分自身が笑顔で授業を楽しむことです。そうすることで、楽しさが伝わって、教室が明るい雰囲気になるように感じておりました。「なんか楽しそうな人」と思ってもらうことで、より気軽に話し掛けてくれるようになったと思います。実際のところ、学生さんを支援させていただいた時間は、非常に楽しく幸せでした。

CTL 掲示板

2023年度春学期のライティングラボ個別相談の利用状況

ライティングラボ アカデミック・アドバイザー 大西 洋

ライティングラボでは、2023年度春学期に688件の利用がありました。この件数はほぼ前年並みで、引き続き多数の学生に、ライティングラボの個別相談をご利用いただきました。利用者アンケートから集計した満足度は99%以上であり、春学期も高い水準となりました。場所別では、千里山キャンパスのラボへの来室が約84%でした。ライティングラボは高槻・ミューズ・堺の各キャンパスでも開室しており、開室日以外にはZoomでのオンライン相談にも対応します。個別相談は1月末まで開室しますので、千里山キャンパス以外の学生の皆さんも、ぜひライティングラボの個別相談をご利用ください！

ライティングラボでは、レポートや卒業論文・修士論文などの文章に関する相談だけでなく、スライド・レジュメ・発表原稿などの発表資料に関する相談、志望理由書など各種の提出書類に関する相談にも対応します。また、これらの文章の作成後だけでなく、作成前や作

成中の時点でも、来室してご相談いただけます。

またライティングラボでは、先生方の授業と連携する、利用指示のご依頼にもお応えします。利用指示による授業連携では、学生に課したレポート等の内容を事前にラボに共有いただくことで、来室した学生に、先生方の要望を踏まえた支援を実施します。利用指示のご依頼は、下記QRコードからお願いします。

利用案内
(教員向け)

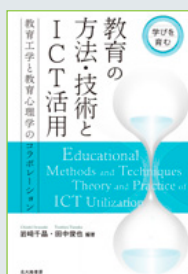


書籍紹介

『学びを育む 教育の方法・技術とICT活用ー教育工学と教育心理学のコラボレーションー』

岩崎千晶、田中俊也 (編著)

対話によって人は学び、知識が構成される。学びのメカニズムをふまえながら、いかに適切な教育方法を採用して授業設計するかについて解説している。また ICT を活用した個別最適な学び・協働的な学びへの道筋を探求している。教職課程コアカリキュラム「教育の方法及び技術」と「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」に対応した書籍となっている。教育推進部からは岩崎千晶教授、山田剛史教授、山田嘉徳准教授が執筆。



定価2,530円(税込)
(北大路書房)

●記事テーマ募集

読みたい、知りたいテーマなど、ご意見をお寄せください。

編集事務局 ctl-staff@ml.kandai.jp 宛、
タイトル【CTL ニュースレター記事テーマ】と明記

●活動報告はWebをご覧ください



KANSAI
UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター CTL Newsletter

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-0230 MAIL: ctl-staff@ml.kandai.jp
<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/>

発行日/2023年12月15日 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター